活動公開で、保護者と地域住民と交流図り

教育の日×西小学校

富士宮市内全小学校では17日を「教育の日」と定め、各校では保護者と祖父母、地域住民の参加型授業参観が開催された。

市立西小学校では自校活動の一層の充実を図る機会として、保護者、祖父母、地域住民が子どもの学びに直接関わることを目的に活動公開を実施したもの。

生活科や西の里学習（富士山学習）などで学習したことを発表したり、来場者と制作活動したり、子どもたちとともに活動し、考えたりする時間を共有した。

今年の同校テーマは「1年ようこそ秋のくにランドへ、2年まちが大好き　おしごとはっけんたい、3年西の里ってどんなところ？発見ちょうさたい、4年みんなにやさしい西の里福祉、5年いいねずごいね、和食と健康、6年出動！災害から救うジンジャー」とし、工夫を凝らした発表で来場者を楽しませた。

クイズ方式で発表する

書作品を作成する児童

身の回りの素材で作ったおもちゃで遊ぶ

学校・地域一体の催し

北山小学校で「フェスタきたやま」開催

教育の日

市立北山小学校（鈴木美和子校長）は17日午前、同校で「フェスタきたやま」を開催した。

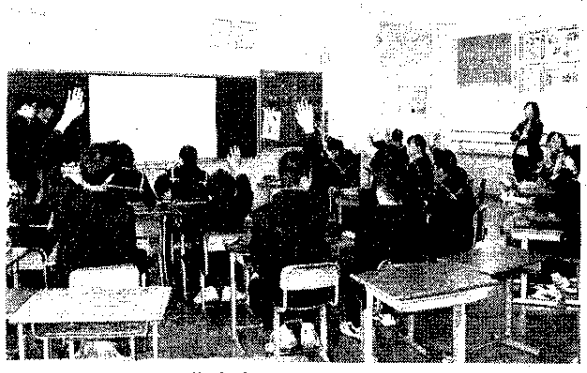
同催しは、①生活科きたやま（富士山学習）で学んできた事、培ってきた力を全校児童や保護者・地域の人達に効果的に伝えることによって、学習してきたことをより確かなものにする。②学級、異学年の発表を聞き、感想を伝えたり、質疑応答をすることで、自分の学習成果を見直し今後の学習活動に生かす。③発表会の運営、盛り上げる工夫、保護者や地域の人々との交流の仕方等について、児童の創意工夫による自発的・自治的な活動を行うことにより、自主性と社会性を養い、集団への所属感を深めて、学校生活の充実と発展を図る。④保護者や祖父母・地域住民の方々が子供の学びに直接かかわることによって、教育における自らの役割を考える機会にする。そして、学校・家庭・地域が子供を共に育てるという意識を共有し、互いの連携・協力をさらに一層促進するきっかけとする。

また、今年度は北山中学との交流事業も平行して行うため、⑤子供たちが「富士山学習」で学んだことを、保護者や地域の方、他校の児童生徒に伝え、互いに意見交換することにより、表現力を培うとともに、小中の連携、地域とのつながりを充実させる機会とする。

以上の5つを目的として、学区内の自治会に回覧でお知らせをした上で開催された。

フェスタは午前8時30分から体育館で開会式を行い、鈴木校長の挨拶に続き、各学年が見所を発表し、9教室と音楽室等の会場での発表を開始した。会場発表では、1学期から始めた生活科・北山の時間で取り組んできた「きたやまバーガー」作りで学んだこと等を劇・歌・クイズ・ゲームで発表した他、秋のたからものランド、身の回りの素材で作ったおもちゃ、北山の自慢～大徳食品を通して～地元の北山用水の昔・今・未来、きたやまの環境を守るためにできること～北山から世界へ～、戦争について学んだことを伝えよう等を発表した。音楽室・多目的教室で北山中3年生が個人追求してきたテーマを、パソコンや模造紙等を使って発表する「卒業研究発表会」では、会場の小学生や父兄・地域の方との意見交流を行った。

会場には、生徒・父兄・地域の人々が家族連れで訪れ、小中学生の発表・作品を見て回り、帰り際にはアンケート用紙に感想を記入し、年に一度の地域の催しとして定着しつつある「フェスタきたやま」を楽しんでいた。


北山中学生徒の発表

富士宮高校会議所プレゼンツ

世界や日本の童話で、別世界に引き込み

富士宮高校会議所プレゼンツ「第3回おはなし会」が17日、西町レトロ館で開催された。

この取り組みは市内の高校生が連携して高校生の視点で地域振興や地方創生、地域ビジネスの手法について実践を通して学び、地域をまきこんだ催しを開く高校会議所主催のイベントで、今回は読書サポーターを招いて日本の昔話『ぬか福と米福』、グリムの昔話『七羽のからす』、アイヌの昔話『クナウとひばり』、イギリスの昔話『赤鬼エティン』の朗読が行なわれた。

会場は女性たちはじめ高校生や地域の支援者など30人以上が参加し、満席となった。

来場者らは読書サポーターによる感情のこもった独特の言い回しで童話を楽しみ、魅力を堪能していた。

会のはじまりには平和の活動を展開している折り紙伝道師三浦久子さんが、高校生に折り紙指導を行ない、高校生らは観光客へのおもてなしのためにと、折り方を学んだ。

読者サポーターが童話について説明

■移動図書館 ひばり号■

▽21日＝富士根保育園（9時45分～10時15分）粟倉分校（10時～10時30分）三ツ矢東保育園（10時35分～11時）富士見ヶ丘集会所（13時45分～14時15分）富士見小学校（14時30分～16時）上井出小学校（14時30分～15時30分）

「香月記」第12回

河津良司

従事者の人柱の上に幾多の断層と湧水に拒まれた未曾有の難工事も16年余の歳月と2673万円の巨費を投じて完成した。

この工事の完成間近い昭和6年（1931）3月、西口工区鹿島組の下請業者の伊沢組の作業雇傭者69人の一斉解雇が起こり、別れ金として独身5円、遺族15円に仕切られたのが争議の始まりであった。69人の労働者は、帰郷や新しい職場を探すための汽車賃にも足りない人非人的仕打ちに対して増額を要求して決起したが雇主は頑として拒絶し、押し問答の形で時日は流れていた。この情報を受けた中央の友愛会（社会民衆等の前身の政治結社）は、即座に中野町議会議員勝田香月を差遣し、現地の賀川豊彦が育成した総同盟沼津支部山田重太郎氏（東京モスリン・後の大東紡績労組、三島市）と合流、鈴木文治氏（中央社民党委員長）の紹介もあって完全に意気投合し、勝田香月の指揮に従い、争議スケジュールを練った。当時、伊沢組事務所は三島大社東隣りの梶尾旅館・セントラル映画館の入り口辺りにあった。香月と山田氏は、伊沢組長に直接面談し相手側の意向を打診すること協議一決の上で事務所を訪れた。

事務所に入ると博徒11人が居直り「親分に口を聞かせるな」と拒否、立て膝で対応する妻君に対して「丹那で儲けているのに、涙銭程度の手切れ金とは如何なものかもう少し何とかならんのか」と詰め寄ると、新手の博徒を加えた16人が「なめるんじゃないぞ」とドスを振りかざして、2人を取り囲んだ。豪胆で鳴らした香月と山田氏の2人も「最早これまで」と覚悟を決めたが、その刹那に読売新聞の芹沢記者が取材の為に入室して来たため、危機一髪のところで助かった。（山田氏の述懐）

そこで、交渉の長期化を予測した香月は山田氏と計って、丹那トンネル争議団事務所を最寄りの大社前で料理屋を経営していた元大日本土木の重役岡本忠男氏（後に郷里の別府に帰り、天皇の御宿所にもなる別府随一の旅館よねやホテルを経営していたが、昭和55年に逝去された。実兄は角屋清一元代議士＝山田氏談＝）後援で、その一角を借り受けて設置した。

岡本氏は馘首された労働者に同情して、事務所を提供したうえに陣中見舞金に金10円、白米1表、醤油1樽を寄贈する等で支援力は倍増していった。

総同盟沼津支部＝東モス労組を主体にデモ行進、争議陳情団演説会等で世論を喚起する一方、政治的には鈴木文治代議士を通じて国会で丹那争議を問題提起する等して戦法を有利に展開していった。驚いた政府は、早速鹿島組の常務を呼びつけて、下請けの伊沢組の労働者搾取の実情を説き、速やかに争議行為を調停するよう厳命した。ここに争議解決の暁光を見出し、遂に調停書が鹿島配下川上常吉・伊沢組長、争議団側から勝田香月・山田重太郎・岡本忠男、三島警察署から遠山特高部長らの立ち会いで次の内容で締結した。①伊沢組長は謝罪して②争議の一切の費用を含め金一封3000円を提供する。③山川肇他26名の坑夫及び調停者一同連署のこと。

更にカンパによる80円を加えて、3080円の基金から、支出後残高を69人の離職者に分配され大勝利の終幕となった。